2024.5.21

ジョン・ダンの詩を読む会　**No. 15**

シェイクスピアと同時代人ジョン・ダン

—イギリス・ルネサンス期の最高の形而上詩人—

高木　登

26　*The Legacy*

When I died last, and, dear, I die
　As often as from thee I go,
　Though it be but an hour ago,
And lovers' hours be full eternity,
I can remember yet, that I
　Something did say, and something did bestow;
Though I be dead, which sent me, I should be
Mine own executor and legacy.

　I heard me say, "Tell her anon,
　　That myself, that is you, not I,
　　Did kill me," and when I felt me die,
　I bid me send my heart, when I was gone,
　But alas could there find none,
　　When I had ripped me, and searched where hearts should lie;
　It killed me again, that I who still was true,
　In life, in my last will should cozen you.

　Yet I found something like a heart,
　But colors it, and corners had,
　It was not good, it was not bad,
It was entire to none, and few had part.
As good as could be made by art
　It seemed; and therefore for our losses sad,
I meant send this heart instead of mine,
But oh, no man could hold it, for ’twas thine.

26　形　見　（高木登訳）

愛しい人よ、この前僕が死んだとき、
　きみと別れるたびに僕は死ぬ、
　それはたった一時間前のことだけど、
恋人と一緒の時間は永遠に思えるもの、
いまでも僕は覚えている、僕が
　何かを言って、何かを贈ったのを。
僕を贈った僕が死んでも、僕は
自分の遺言執行人であるのと同時に、僕の形見でもある。

僕は僕が言うのを聞いた、「彼女にすぐに告げてくれ、
　僕自身が、それはきみであって、僕ではないのだが、
　僕を殺したのだ」と。僕が自分の死を感じたとき、
自分が死ねば、その心臓（こころ）を贈るように自分に命じた。
しかし、悲しいことには、そこには何もなかった、
　我が身を切り開き、心臓のある場所を探しまくったけれど。
そのことが僕を二度殺した。生前、誠実を貫いた僕なのに、
最後の遺言できみを騙す破目になったので。

心臓（こころ）らしきものはあったが、
　それには色がついていて、角があり、
　よくもなければ、悪くもなかった。
20　それをそっくり持つものは誰もなく、一部を持つものも稀だった。
見たところ、出来栄えはかなり上出来だった。
　それで、僕たちが失ったものの悲しみのため、
僕の心臓の代わりにこの心を贈ろうと思ったけれど、
誰にもとることができなかったのは、それがきみのものだったから。

【訳注】
18　「色がついている」のは偽善を表わし、「角がある」のは、円ではないということで、不完全を表わす。（パトライズの注による）

形見の品　（星野徹訳）

ぼくがこの前死んだとき、というのは恋人よ、
　おまえから別れるたびにぼくは死ぬのだし、
　たとえ一時間前であってもそうなのだし、
そもそも恋人同志の一時間は永遠にもひとしいものだから、
そのときのことをぼくは忘れない、ぼくが
　何か遺言をして、何か形見の品を贈ったのを。
ぼくを遣わしたぼくは死んだのだから、
ぼくみずからが遺言執行人となり、形見の品とならねばならなかった。

ぼくはぼくに言ったのだ、彼女にすぐに告げてくれ、
　ぼくを殺したのはぼく自身、つまりおまえであって、
　ぼくではないと、そして臨終を悟ったとき
ぼくが死んだら、この心臓を贈ってくれと命じたのだ。
しかしああ、何も見つかりはしなかった、
　ぼくがぼくを切り開いて、心臓のあったところを探したが。
ほとほと死にきというところだ、生前誠実を通した
あのぼくが、最後の遺言でおまえをだまそうとは。

それでも心臓らしきものを発見した、
　ただそれは化粧がしてあって角ばっていた、
　それはよくもないが悪くもなかった、
そっくり授かった者もなく、一部にあずかった者もなかった。
模造にしては最高の出来ばえに見えたし、
　だからぼくらお互いの損失でもあった、
ぼくはぼくの心臓の代りにそれを贈ろうと思ったのだが、
ああ、誰ひとり掴むことができなかった、おまえの心臓だったから。

27　*Lovers' Infiniteness*

If yet I have not all thy love,
Dear, I shall never have it all;
I cannot breathe one other sigh, to move,
Nor can entreat one other tear to fall.
All my treasure, which should purchase thee
Sighs, tears, and oaths, and letters I have spent.
Yet no more can be due to me,
Than at the bargain made was meant.
If then thy gift of love were partial,

That some to me, some should to others fall,
    Dear, I shall never have thee all.

Or if then thou gavest me all,
All was but all, which thou hadst then;
But if in thy heart, since, there be or shall
New love created be, by other men,
Which have their stocks entire, and can in tears,
In sighs, in oaths, and letters, outbid me,
This new love may beget new fears,
For, this love was not vowed by thee.
And yet it was, thy gift being general,
The ground, thy heart, is mine; whatever shall
    Grow there, dear, I should have it all.

Yet I would not have all yet,
He that hath all can have no more;
And since my love doth every day admit
New growth, thou shouldst have new rewards in store;
Thou canst not every day give me thy heart,
If thou canst give it, then thou never gav’st it;
Love's riddles are, that though thy heart depart,
It stays at home, and thou with losing sav’st it:
But we will have a way more liberal,
Than changing hearts, to join them, so we shall
    Be one, and one another's all.

27　恋人の無限性　（高木登訳）

きみの愛のすべてをまだもらっていないとすれば、
愛しい人よ、これから先もそれをもらうことはないだろう。
きみの心を動かす溜息は出尽くし、
流す涙は一滴も残っていない。
きみを贖うための僕のすべての宝物、
溜息、涙、誓いの言葉、恋文を全部使い果たしてしまった。
それなのに、愛の取引で交わされた以上のことは、
何一つ残されていない。
きみの贈る愛が部分的なもので、
一部が僕に、一部は他の誰かに渡るのであれば、
　愛しい人よ、僕が君のすべてを得ることはあり得ない。

あの時きみがすべてを僕にくれていたとしても、
そのすべては、その時のきみが持っていたすべてでしかない。
その時、あるいはこの先、きみの心に、
他の男たちによって、新しい愛が生まれるかもしれない。
彼らは、涙も、溜息も、誓いの言葉も、恋文も、
そっくり手つかずで、僕に勝っており、
この新しい愛は、僕に新たな心配を産み出す。
なぜなら、この愛はきみが誓ったものではないから。
だが、きみがくれたものが包括的なものであれば、
大地であるきみの心は僕のもの。そこで何が産まれようと、
　愛しい人よ、それはすべて僕のもの。

いや、僕は君のすべてを欲しいとは思わない、
すべてを得た者は、それ以上もらうことができない、

25　それに、僕の愛は日々成長していくので、
きみは新たな報酬を蓄えていかねばならない。
きみは毎日僕にきみの心をくれるわけにはいかない。
それができるとすれば、くれていなかったことになる。
愛の謎は、きみの心が出て行っても、
30　もとの処に留まり、失われることが、蓄えることになる。
だが、僕たちはもっと開放的な道を選び、
心と心を交換するより、二人の心を一緒にまとめ、
一つにすることで、互いにすべてとなろう。

愛の無限　（星野徹訳）

もしいまだにおまえの愛をまるごと頂戴していないなら、
恋人よ、今後も頂戴することはないだろう。
ぼくにはこれ以上おまえを動かす溜息一つつけないし、
これ以上こぼれて貰う涙の一滴もない。
おまえをあがなうべき財宝はことごとく、
溜息も涙も誓言も、また恋文までもつかい果たした、
それでも契約成就のあのときに差上げますわと言ってくれた
以上を望むつもりはさらさらない。
もしあのときのおまえの愛がまるごとの愛でなかったのなら、
一部はぼくに、一部は誰かに配当するはずであったのなら
恋人よ、おまえをまるごと頂戴することはないだろう。

それともたとえあのときまるごと頂戴できたにしても、
そのまるごとは、そのとき持ち合せたまるごとにすぎぬ、
もしもあれからおまえの心に、現在、もしくは今後でも、
あたらしい愛がほかの男によってつくられれば、
しかもそいつに手つかずの財産があって、涙を使うにせよ、
溜息、誓言、恋文、みなぼくより高値をつけるとすれば、
このあたらしい愛はあたらしい怖れを生むだろう、
この愛がぼくのものだという誓約はなかったのだから。
とは言えやはりそれはぼくのもの、愛の贈与は万般にわたる、
おまえの畠、つまり心はぼくのものだ、そこにどんな作物が
育つにしても、恋人よ、ぼくがまるごと頂戴する。

それでもまるごと頂戴する気にはまだなれない、
まるごと貰ってしまってはそれ以上は貰えぬわけだし、
それにこのぼくの愛が日ごとに成長するからには、
おまえの方にもあたらしいご褒美の貯えがなければならぬ。
毎日おまえの心をくれるなどとはできない相談、
もしできるとすれば、まだくれていなかったことになる。
愛の不思議は、おまえの心がこちらにきても、
そちらに留まっていること、失いながら心を貯めてゆくこと。
しかしぼくらにはもっと気前のよい方法がある、
心を交換するのでなく、合計することだ、そうすればぼくらは
一つになり、お互いにまるごと頂戴できる。